

卷之三十一

叫聲は皆より聲の大合囃。正月も「正月」、本年も「なりました」。正月は七日
も「七日」の儀式があり、その中でも一番印象深かったのは、「同族無の士の先生」と共同
セミナーを行った。これは、今流行の「終活」と呼ばれる取り組みを考えること。「死・備え・生キ
ル」というと共通の「死」へと向かうが、仏教から翻して「死」と法律から見た「死」という
言葉が、神社から見えて「死」には、お詫びと一連の意味がある。

卷之三

終活とは、就活にならざりて「人生の終わりのための活動」の略として使われる。内容は、生きてるうちに自身のための葬儀儀式が準備される事である。一般的に、葬儀場や相続税申告書などを利用し、残った者が財産を相続する時にかかる税金を減らす目的で、一般的である。

私は終活と終身計画がまだ人生計画」と思っており、いざこの年齢になると「死に向かう準備」が頭をよぎるようだ。死を迎えた時に「生き人生だった」と言えるように死に向かう準備をしておきたい。つまり、一番の終活は、「死」の人生無限命

今も生きる



死を考えるといふことは、「今」とどう生きるかを考えることです。決して、暗い言葉ではない。命と輝かず大事な「一マニ」です。命というものが有限があり、いつ終まるのが誰にもハヤからぬからこそ、何がや未来ではなく、「今」に一番の価値があります。有限の命を意識するには、何よりも、このかけがえのない「今」に気付ける、「今」という一時を大切にして生き方へと直面しなくてはなりません。

同上

現在は縁を一切3つとされる中でつなげています。まずは、自身の身回りを見渡し、主体的な縁を作ることはいい。しかしとした人間関係を作ることが終局のはじめの一歩だと考えます。法律は、その後に必要な手続きや法律を通じて準備は、あくまでも手段のひとつとして、目的はより良いへんりくをといふことです」とおしゃっていました。

備え



現仕事に行かれて終始は「備え」と称して、欲とあらう取り組みに
はなれぬうちに感心じ居た。終活自体を否定するだけではなくて、可能な選択肢
と増田や一と云ふことより、一つして欲しいといふ我欲ばかりが溢れてくるに因るう
のだが。どうして、「死とは全て任せても」といふ。後半になると、現実に対する
心象に任せるべしとする者たちが清々しい日々を送り、せむるとはしないようだ。
「迷惑」とか「だくな」と因るつらさよりもハッキリ出でるが、「死」配して「大丈夫だ」と
いふ言葉も、死んでから死んでから生きたかったら、何より「備え」と私は考へて以
て来た。終活に人生觀は關係ありません。一生も「死」に終活の精神と考えておる。

吳同林印